

生活発表会をめくって

—保育の見直し一年目—

入江 礼子

はじめに

保育の見直しをはじめた平成十三年度、それまで伝統的に続けてきたマジックミラーの裏側から子どもたちには分からないように幼稚園での様子を観察する観察日を廃止した。そのかわりに保育参加ウィークと銘打って、六月と十一月の二回保護者参加型の保育公開

ウィークを持った（その経緯は本誌第一〇〇巻十号、一〇一巻第四号に書かせていただいた）。保育の見直しを始めて一年目の保育を公開するということにはとても勇気がいったが、ともかくありのままを見てもらって、それをもとに保護者との話し合いを持ち、少しでも私たちの保育を理解してもらいたいという思いから批判を覚悟で実施したのである。

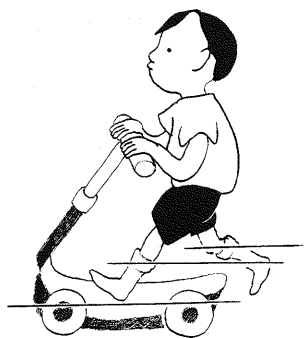
親たちとの話し合い

ところで幼稚園では昨年度まで保護者との話し合いの場はクラス懇談会のみで、父母の会もない状態であった。そこで今年度は保育の見直しとともに、保護者ともオープンにして話し合っていくシステムを模索した結果、父母の会の試行的な立ち上げとともに、園長・副園長との各クラス月一度の懇談会をはじめることとした。その結果、この懇談会は担任とは違った角度からみた子どもたちの様子を伝えたり、保護者の側場として位置づき始めた。また、大きな行事などがある月には前もって保護者にその意味や大枠を説明する場ともなった。

第二回保育参加ウィーク後の保護者の大きな関心は十一月から二月に先送りした「生活発表会」であった。懇談会ではそのことを説明しなければならぬ。そこで職員会議で例年の生活発表会の様子を保育者か

ら聞くことにした。この生活発表会では、クラスごとに歌、踊り、合奏、劇というように形が決まったプログラムをずっと続けてきたということであったので、いままでの不都合やら、今年の子どもの様子を見ての改善点を話し合った。そのことを踏まえて私の方からの要望として、まず併設大学の講堂（約八〇〇人収容）では広すぎることに、もう少し子どもと親が近くで、無理なく楽しめるようにしたので今回は幼稚園のなかにあるリズム室で行ないたいという提案をし、リズム室案で保護者に説明することになった。

懇談会では年長、年中、年少といつも通りクラスごとに話したのだが、年長組の保護者との話し合いはかなり白熱したものになった。私たちの方針の大きな柱は子どもたちに



とって無理がなく楽しめるものにしたというものだった。そのためには例年行なっている併設大学の講堂で行なうのではなく、幼稚園にあるリズム室で行ないたいと提案した。しかしその途端、反対の声があった。「えっ、何ですか？ せっかく立派な講堂があるのに。他の幼稚園ではわざわざお金を出してホールを借りるんですよ。もし、大学が貸してくださいのなら、他を借りてもいいです。ともかく最後の生活発表会だし、なんとかなりませんか？」（保護者）。「大きい講堂だと、子どもたちの声が聞こえないので、固定マイクのところでせりふを言うことになるんです。そうすると劇もリズムが途切れてしまうところになるですよ。だからマイクを使わなくても聞こえる大きさのところでやった方が良くと考えました」（私）。「二年間、この生活発表会を祖父母も含めて楽しみにしていたんです。一生懸命やっている姿をビデオにも収めたいし。リズム室じゃあね。何のためにこの園に入れているんだか分からなくなってしまう

ので、どうしても講堂でやって欲しいです」（保護者）。「母親たちも大きな舞台で歌うのを楽しみにしているんですよ。親たちにとってもわくわくする日なのです。なんとかなりませんか」（保護者）。「講堂でやるのでなければ意味がないので、それだったら、子どもを休ませます！」（保護者）。「……」（私）。

私や副園長のNさんが考えた以上に併設大学の講堂で行ないたいという意見が多く、そして強かった。このまま、リズム室案を強行しようか、それとも講堂でやることにするか……。一応親の意見をもう一度職員会議に持ち帰るということで回答は少し待ってもらうことにした。

職員会議では親たちの要望が以上のものであり、特に年長の親たちが強硬であったことを伝え、どのようにするかを検討した。今年度の幼稚部の様子を親の側から考えてみると、園長の交代から始まって、例年とは違うことだらけと思える日々だったといえる。その時々説明で納得できることもあったとはいえ、やは

り生活発表会のような親たちからは「子どもの晴れ舞台」と思えるようなことの変更はなんとしても阻止したいということだったのだろう。このような状況でリズム室案を強行することは他のことでも保護者の協力を得られなくなる可能性が出てくると考えられた。そこで今年度は例年通り大学講堂で生活発表会を行うことにし、その中味を子どもたちに無理がないようにしようという譲歩案を保護者に提案することになった。

この提案は一樣に親たちに安堵感をもたらしただけで、いえ私としてはまさに朝令暮改を地でいく結果となつたわけである。これもまだまだ保護者に自分たちの保育を伝えきれない現実ととらえ、大学講堂という場で行なうという制約のなかでその中味だけはしっかり目の前の子どもたちをみてやっていこうと保育者たちと話し合った。

生活発表会までの経過

二学期の末に例年の生活発表会のもち方を保育者に

聞いた。それによると劇をやるのは年長で、自分たちでせりふを考えて作るということ、また練習期間は約二週間でその間の保育内容はほとんど発表会に向けての準備だったということであった。さらに普段の園生活の内容と発表会での内容はほとんど連動していないということもわかった。今回もまた、いままで園では行事と普段の保育の関係についても詰めた話し合いを行なうという風土がなかったということが明らかになった。場所は例年通り大学講堂を使用するが、内容だけは何か子どもたちの普段の生活が出るようなものにして欲しいと話し、それぞれどんな内容にするかを冬休みの間に考えてきてもらうことにした。

三学期を迎え、生活発表会まで一か月を余すだけとなった。三学期からは保育者の一人が産休に入り、四歳児のクラスには今までフリーで入っていた他園を二年経験した保育者が担任として加わることになった。また新たに、いわゆる自由保育形態を中心として保育を展開している園で十一年の経験を持つ保育者にフ

リーとして入ってもらった。

学期始めの話し合いでそれぞれのクラスの計画が話された。三歳児のクラスは六人という少人数でもあり、果たしてどうなるのか不安もあるが、子どもたちが大好きな絵本から題材をとってストーリー展開を行い、それに現在興味を持っている楽器を使う場面を組み入れてやっていきたいということだった。また、四歳児のクラスは彼らの好きな踊りや楽器を保育者の作ったストーリーのなかにはめ込み、その練習もできるだけ普段の保育の中で自然にやっていきたいという方針が話された。そんななか五歳児の担任はとても悩んでいた。その悩みの大きなものは例年通り劇と合奏を二つともやるのかどうかという問題だった。このクラスは年度始めのクラス懇談会でも紛糾した。以来保育者がそういう親のプレッシャーを感じ、今回の発表会でもプログラムを今までどおりに合奏と劇の両方をやるべきか、あるいは子どもたちの状態に合わせて劇一本にするかで迷ったのである。私は担任に発表会の

場所は親の意向を反映した形で譲歩はしたが、その内容に關しては例年通りというよりも今の子どもたちの姿をみて、この発表会を通して何を育てていきたいかということに絞って考えても良いのではないかと話した。それからしばらくして担任は経験豊富なフリー保育者と相談しながら、そのときのクラスのねらいである「他の子どもたちの気持ちに気づく」ということが少しでも達成できるような内容をもった劇一本でやっていくと決断した。

担任たちはそれぞれ日常の生活を大切にしながらも、生活発表会の出しものに向けての時間も組み込んだ一日の流れを試行錯誤しながら作っていった。

三学期が始まって二週間たった頃、併設短大の学生によるオペレッタが大学講堂で披露され、幼稚園の子どもたちも招かれた。動物が主人公の舞台は、今子どもたちが取り組んでいる発表会の内容と重なり、子どもたちも舞台に集中していた。オペレッタの後には特別に幼稚園も舞台に上がって「世界中の子どもたち」

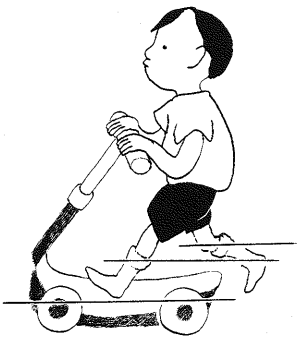
を手話つきで歌うことになった。保育者側の予想に反して子どもたちは物怖じせずに舞台上上がり、楽しそうに歌った。この様子を見て、やり方、持っていき方によっては子どもたちが楽しみながらできるかもしれないという手ごたえを得た。この舞台を機に、私たちのなかにあつた講堂での発表会に対する後ろ向きな思いが払拭された。

とはいえ、大学講堂で子どもたちが楽しく行なうためには、いくつか越えなければいけないハードルがあつた。一つはマイクの問題だつた。今までは二本の固定マイクを置き、子どもたちはせりふごとにマイクの前に出て話していたという。それでは劇にならない。集音マイクさえあれば、この問題は解決できるのではないか。ということでも毎年学芸会を行なっている併設小学校に聞きに行った。すると集音マイクはあるとのこと。ならば大丈夫、子どもたちの劇の流れを中断せずに行なうことが可能だ。それからともかく講堂は広いので、その広さを計算に入れて子どもたちの姿

が引き立つように大道具の準備もしなければならぬ。今年度は幼稚部での自主的な実習を申し出てきてくれた短大生に舞台の大きさを睨んだ背景を考えてもらい、製作を手伝ってもらつた。ともかく担任たちが日常生活を大切にしつつ、かつ子どもたちとともに劇作りができるように後方支援だけはしっかりやっていきたいと考えたのである。

大学講堂での練習

幼稚部は学園の西端に位置し、大学講堂は東端にある。その移動は子どもたちの足で五分はゆうじにかかるといよいよ一週間後に迫つた発表会。大学講堂は普段、子どもたちの生活の場でないため、一週間をかけてその場に慣れつ



つ、練習する時間をとることとした。この時期、幼稚園では風邪やインフルエンザが流行り、とくに四歳児のクラスがその直撃を受け、毎日半数近くがお休みという日も多かった。二月という時期では逃れられない運命なのかもしれない。そんな悪条件ではあったが、講堂での練習が始まった。まず初日の三歳児。なんといつても講堂が珍しい。広い講堂は走り回るには絶好の場所だ。あちこち走り回っては大きな声を出しての大騒ぎ。三歳児らしいといえどもそんなのだが、担任の求心力が求められるということを確認した。ともかく講堂に通って慣れてもらい、この場は珍しい場でなくなるのを待つばかりという感じだった。四歳児は休みの人が半分いたこともあり、筋をつなげるのが大変だった。そして五歳児。ほとんどの子どもたちがストーリーをつかめているからだろうか、やる気満々。場を変えてみて、年齢よっての違いが際立った一日目となった。

それから約五日間、講堂での練習が続いた。三歳児

も場に慣れはじめ、出しものもいつも遊んでいる遊びを舞台に持ってきているので割と自然にできる日も多くなつてはきた。しかし相変わらず珍しいものが舞台にあるとそれに気をとられるので、本番の日の出来は神様の思し召しに任せようと、担任は緊張しながらもゆつたりすることを心がけたようだ。四歳児は相変わらず休みの人が多く、少々心配をしたが、自分たちの劇だけではなく、五歳児がやっているのを楽しんだり、衣装を着るとそれが嬉しいらしくはしゃぐ姿も見られた。また五歳児も四歳児の劇のなかの踊りの場面になると一緒に踊ったりと、子どもたちは子どもたちなりに楽しめている様子が見えてきた。また自分たちの劇でもアドリブを入れたり、回を重ねるごとに工夫している様子がかがえた。

一方、この間に子どもたちの様子を少しでも理解してもらうために、担任には劇が出来るまでの過程や、幼児期の一年間の成長がどれだけ大きいものであるかをプリントして配布してもらった。ともすると、自分

の子どもにだけ焦点を当てがちな保護者に少しでも広い目を持って子どもたちを見守って欲しいと願うことである。

生活発表会を終えて

こうして大きな舞台で行なうという制約のもとでの発表会となったが、短大生や大学生にもボランティアとして入ってもらい、その助けもあって少なくともキラキラした発表会にはならずすんだ。例年よりも劇の内容がよく分かったという保護者の声もあり、一応はホッとしたが、五歳児の親のなかには合奏がなかったことの方がかったという意見を述べた方もいた。保護者のマイナス意見のなかには今の保育の弱点を突かれている場合がある。このことを謙虚に受け止めなければと思う。

一応子どもたちはなんとかこの大舞台をこなしたものの、大きな舞台で演ずることを意識し、かつ楽しめたのは五歳児だけだったという現実もあった。子ども

たちにとっても無理がなくそして保護者も楽しめるものということを今後も目指すのであれば、この舞台については再考を要するだろう。

ただしこの問題は舞台をどこにするかという問題に留まる問題ではない。保育の見直しを始めて一年目ということもあって、私たちよりこの幼稚部という場では先輩の親たちが多い現状のなかでは、こちらがよしとしたことを今回のように不本意であっても引つ込めざるを得ないこともあった。また、こうしたいという思いはあっても、幼児理解をふまえた保育内容、及び技術の面でまだまだ達成できないことも多い。でも、できないこともオープンにしつつ、保育を開いていき、話し合いを続けることで次のステップが見えてくるのではないか。保育の見直しという一つ一つを自分たちで考えていく地味時には心痛い作業を続けつつ、「開く」という言葉をキーワードにして、二年目を迎えたいと思っている。

(鎌倉女子大学・同幼稚部)